

平和を明日へ

広島原爆73年

(上)

広島への原爆投下から73年の月日が流れた。被爆者の高齢化に伴い、被爆体験を次代にどう傳承するかが大きな課題となっている。世界には今なお1万4千発以上の核兵器があるとされる中、その恐ろしさを伝え、平和を明日へつなぐと模索する人々を追った。

「青春、人生の大半を奪腕にガラスが刺さっていった。原爆の日の6日、た。何とかはい出すと、周
 広島市内での被爆体験講話 田の建物が消えていた。全
 で、被爆者の梶本淑子さん 身を焼かれた人々が、垂れ
 (87)が証言した。 下がった皮膚を揺らしてさ
 当時14歳だった梶本さん まよっている。ちぎれた片
 は、爆心地から約2キロ離れ 腕を抱いた男子中学生が、
 た学徒動員先の工場にい 目の前で息絶えた。
 た。突然、窓に青い光が走 焼け野原になった街。あ
 る。爆音が響き、意識が途 ちこちで死体の山が積み上
 絶えた。気が付くとがれき がり、肉片が転がり、死臭
 や材木の下敷きになり、右 に包まれた。広島は「地獄」

被爆体験の傳承



「広島で学んだことを一人でもたくさんの人に伝えてほしい」と語った梶本淑子さん
 —6日午後、広島市

命の大切さ 思い託す

になつていた。3日後、自 かった。放射線の影響か、
 宅に向かう途中で父と再 父が1年半後に急死。母も
 会。「もし淑子が見つかつ 原爆症で入院した。梶本さ
 たら、死ぬ前に食べさせて んは3人の弟を養うために
 あげて」と母が父に持たせ 必死で働き、教員になる夢
 た白いにごり飯を見て、涙 はかなわなかった。多くの
 があふれた。 友人をがんで亡くし、自身
 「私には戦後の方がつら も胃がんを患った。

被爆の記憶は忘れようとしてきたが、孫の説得を受けて2001年、証言者として初めて講話。小学生が一生懸命に聞く姿に感動し「本気でやろう」と決心した。現在は国内外で年間130回以上、証言に臨む。よわい87を数えてきた中、毎年「今年で終わり」との感覚になるという梶本さん。それでも「自分が感じたことを伝えるために生かされていると思う。足の立つ限り、伝えたい」。

広島市によると、全国の被爆者の平均年齢は18年3月現在、82・06歳。証言者が減る中、市は12年度から原爆の惨禍や被爆者の願いを受け継ぐ「被爆体験傳承者」を養成している。

3期生の鳥越加寿代さん(60)は、梶本さんの証言を継いだ10人のうちの1人だ。18歳から広島で暮らすのが、原爆について深く学んだことはなく「このままでいいのか」と考えた。傳承者が避けて通れないのが、他人の経験語る難しさ。鳥越さんは、梶本さんの体験談を基に原稿を書き上げた際に「当時に戻れたことが力になっている」という。原爆の被害を理解しなければ核廃絶に賛同できないとし「少しでも知るきっかけをつくりたい」と力を込める。

梶本さんは自身の傳承者に「すぐ真面目で一生懸命」と信頼を寄せ、思いを託す。「被爆の実相と命の大切さを伝えてほしい。あんな残酷なことが二度とあってはならない」(桑原大輔)